

# 阿波女

# 翔る

6

「小さな目標を立てて、達の活動に没頭した。英語を使成するためにどうしたらいいか工夫するのが好き」。努力家で、前向き。英検準1級や日本語講師など、5種の資格を持つ。しかし能力を十分に生かせるようになったのは、40歳を迎えてからだだった。

結婚後1男2女をもうけ、家事と育児に追われた。子どもと過ごす時間はかけがえのないものだったが、社会と断絶した生活にふと「居場所がない」と感じてしまう。心の空白を埋めるように、時間を見つけては資格試験の勉強に取り組んだ。

転機が訪れたのは、37歳の時。育児が一段落して通い始めた英会話教室の講師に勧め

## 県労働者福祉協議会 兼松 文子さん

徳島県労働者福祉協議会(労福協)次長の兼松文子さん(55)。県内在住外国人や、出産で退職した母親らの就労支援に取り組む。関連事業を打ち出し、日本語講師として教壇にも立つ彼女を突き動かすのは、社会とのつながりを求めているかつての自分だ。

米ポップス・デュオ「カーペンターズ」の曲などを聴いて英語が好きになり、徳島大在学中は英語学習サークルで



# 40歳で主婦から転身

られ、女性の社会進出先進国を視察する「徳島県女性リーダー養成海外派遣事業」に応募し合格。派遣先のニュージラントでの視察を基に提言した女性リーダー養成講座のアイデアが県に採用された。「派遣をきっかけに、思いもよらないことが起こり始めた」。派遣事業参加者の紹介などで、日本語講師の資格を輝いてほしい」。労福協では生かして外国人に日本語を教えるようになった。そこで、彼らが自立するためには日本語を身に付けさせる必要があることを痛感。1997年、講師仲間と日本語習得を支援する市民団体「JTMとくしま日本語ネットワーク」の前身となる組織を立ち上げた。活動が広く知られるようになり、日本語指導のできる人材を探していた労福協から職員採用の声が掛かる。不感にして、人生初の就職。約20年の主婦生活を経て手に入れた、社会での居場所だった。

そうして飛び込んだ労福協で知り合う外国人は、母国で高等教育を受けて高い能力を持つ人も多かった。しかし日本語ができないため、徳島では単純労働に従事するしかない。彼らの姿が、努力で培った力を生かし切れなかったかつての自分と重なった。

「日本社会で役割を持ち、輝いてほしい」。労福協では介護試験に特化した講座やビジネスマナーを学ぶレッスンなど多様な事業を展開する。主婦から転身し、走り続ける。自分のことは退職後でもいいかな」と和やかに笑う。「今は支援が生きがなり、その一つ一つの歩みが、多様な働き方、生き方が認められる徳島の実現につながると思うんです」。

(乾栄里子)

毎月第2・第4水曜掲載